
変節

北角 三宗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変節

【Zコード】

Z0073Z

【作者名】

北角 三宗

【あらすじ】

戦国時代、南奥州塩松。

大内定綱の前半生を描きます。

塩松は強国に囲まれた小国なればこそ、周辺諸氏との外交関係で以つて体制を維持していました。

定綱は主家石橋氏を放伐し、「塩松殿」の名跡を継ぎます。その後も、情勢を読んで他家を翻弄し、勇躍の時を迎えたのですが……。

弘治の頃（1555～58）。塩松は小浜城。ある昼下がり、大阿弥丸は私室にて、傳人と共に史籍の回読をしていた。

「壬午入吉野宮時左大臣蘇我赤兄臣右大臣中臣金連及大納言蘇我果安臣等送之自菟道返焉或曰虎着翼放之是夕御嶋宮」

『日本書紀』卷第二十八、天武天皇の即位前紀の件である。

大海人皇子は、この大津を出た翌日（天智天皇十年十月廿日）に吉野へ入り、翌年夏までの半年余りを当地にて頓居する。そして、病床にあつた天智天皇が死んだ後、遺児たる大友皇子が自分を弑しようと計画していることを知るや、僅かな兵を率いて打倒に立つ。そして諸勢力を糾合しながら北へ攻め上り、挙兵からひと月後には大津朝を滅ぼしてしまう。

寡兵にて立ち、大敵に当たつてそれに打ち勝つ。
英雄譚はいつの世も子供の心を惹き付ける。

大阿弥丸もその例に漏れず、退屈な話の羅列に見える『日本書紀』の中では、ここからが最も好きな箇所に当たる。この分冊ばかりはもう幾度も読んでいるのに、心は逸つた。

そのとき、父の小姓がふすま越しに声を掛けた。
「お父上様がお呼びです」

大阿弥丸は落ち着いた表情で頷いて見せたが、回読の腰を折られ

たことに不快を得、不意の呼び出しに戸惑い、思い浮かばぬその用件を訝しんだ。そして父の書斎へ歩を進めるに伴い、心が石のように重くなつてゆくを感じていた。

父にしてみれば、いずれ自分の名跡を継がせることになるであろう嫡男のこと。一族の繁栄、そして主家の榮耀の道を託すことに入る以上、万事につけ、高みを目指す気持ちを持ち続けるようにと、薰陶してきたつもりだろう。妾腹の子も幾人かいるが、正妻腹で長男となれば、次代の惣領となることはもはや誰の目にも疑いない。

大阿弥丸には、そんな父の評価が狭い了見に捉われているように思われ、殆ど顔を合わせぬ日などないにも関わらず、肉親にも関わらず、馴染むことができないでいる。父の気持ちが解らぬ訳ではない。ただ、惣領としては兎も角も、次代の筆頭家老と言われても、ピンと来なかつた。

主君には男子がない。とすると、いつたい自分は誰に仕える為にこのような教えを受けていのだろう、という疑問がずっとあつたからだ。

ただ、斯様な期待は余計なお世話と感じつつも、書物も弓馬も嫌いな性質ではないことから、常に自ら込んで鍛錬している。そんな前向きな姿勢に対しても更なる啓蒙を求めてくるものだから、一層父を避けるようになつっていたのだった。

大阿弥丸は書斎に入つて父に対座すると、暫くの間その凝視に晒された。父は珍しいものでも見るように、目を丸くしてジロジロと大阿弥丸の容貌と所作を細見している。

その、いつもは見せぬ父の仕草に、どこか殺氣にも似た鬼気迫るものを感じ取つた大阿弥丸は、頻りに逃げ出したい衝動に駆られたが、正座した膝の上で拳を握り、じっと我慢していた。

父がおもむろに口を開いた。

「其方を、……養子に出すことについなつた」

父の膝下の辺りを見つめていた大阿弥丸は、その言葉に対し反射的に目を上げた。耳を疑つて問い合わせしたかつたが、呑んだ息が継げなかつた。

父の後継者となることを疑わなかつたからこそ、今の自分がある訳で、それを否定されてしまつては、致仕・放逐と一緒に思つた。

父が言葉を継ぐ。

「殿の婿となる」

「……えつ？」

漸く言葉が出た。

主君には、女子も一人いるきりだつた。名を志保といつ。その母は父の妹、つまり大阿弥丸には叔母に当たるので、この女子とはいとこ同士ということになる。

この志保姫は大阿弥丸より少し年上で、主君はこれに婿を取るべく周辺諸氏に様々働き掛けてきたのだが、なかなかまとまらないでいた。

大阿弥丸はずつと、自分はその姫君の婿に入った者の家老になるのだという、漠然とした思いで系図上の彼女の位置付けを意識しており、彼女自身というものに関心を払つたことなどこれまで殆どなかつた。ただ子供心に、まだしつかり見たことのない姫君のことを、その縁遠さから、余程の醜女なのだろうと勝手に思つっていた。その程度の存在である。

自分がその婿に入るとは、ゆくゆくは名代にでもなり、姫との間に生まれる子供に「塩松殿」の名跡を譲る役回りになるということ

である。

大阿弥丸は何とも実感がなく、半ば放心状態の父に倣つて神妙に座つていた。

1 (後書き)

初投稿なので、行間の空け方やら1回分の長さや、手探りです。
ご了承下さい。

塩松は、南奥州安達郡の東半部にある地名であり、地域の総称である。同郡西半部の一本松とは郡の中央を縦断している阿武隈川を境とし、北は伊達郡小手郷、南は田庄村に接する。東の山岳地帯を越えると、相馬領の行方郡や標葉郡に通じる。

地勢は、郡東端にある日山を最高峰として中小の山岳が乱座し、西方の阿武隈川へ近付くに従い平地が広くなる。山岳の谷間を縫うように川が縦横に流れ、それらはいずれも阿武隈川へ注ぐ。小浜川は塩松の中央を南北に縦断、口太川は塩松の東部から南部へ大きく囲繞するように西流する。この両川は小浜北方にて合流、更に阿武隈川へ注いでおり、この二つの川に平行して主要道が走っている。

戦国期、塩松は石橋氏の領分となっていた。石橋氏は足利一門として室町前期に奥州へ下向し、塩松に土着した名族である。

塩松は石橋氏以前から、宇都宮氏や吉良氏といった名門が拝領していた由緒ある土地柄で、石橋氏もまた、一本松の畠山氏と並んで南奥に重きを為していた。

石橋氏の居城は、住吉城と塩松城の二つが本城として存在する。両城は口太川を挟んで東西に隣接しており、蛇ヶ淵の渡しや幾つかの小橋で連結している。そしてそれぞれ東の新殿、西の小浜などの城砦に向けて街場が展開され、本城を中心とした防衛圏とでもいうべきものを形成しており、重臣の居館の多くがその範囲に收められていた。即ち両城は、周辺部も含めて広大な一つの城域、それぞれを曲輪・出城という位置付けとして把握することができよう。

大内定綱は天文十五年（1546）、塩松の小浜に生まれた。父

は石橋式部大輔尚義の筆頭家老、小浜城主備前守義綱。母は常州太田城主佐竹義篤の娘という。幼名は大阿弥丸。幼くして才気が走り、性は淡白にして礼を重んじ、大声を出して騒ぎ立てるようなことがないが、かといって沈鬱な風情もなく、いつも気付くとその場の空氣に馴染んでいる。一方で怜俐な面を持ち、親しい朋輩や近習の些細な誤りであつても厳しく咎め立て、自ら裁くことを快しとする趣もあつた。

大阿弥丸の名は、石橋家が篤く帰依している時衆に因る。

天文初頭、尚義の父先代定義は隠居後入道して静阿を名乗り、居城住吉城域に十願寺金山道場を開山、塩松に於ける時衆の根拠と為した。その影響によつて、嫡男の尚義はもとより、家中諸士に至るまで時衆を嗜んだ。何阿、何々阿という名を好むのは、時衆の特徴である。即ちそれが大阿弥丸の命名となつた次第で、石橋家中ではこれまでもしばしば用いられてきた幼名である。

隠居後も大御所として内外の政事の中に居座り続けていた定義が天文十四年に死ぬと、当時その筆頭家老の地位にあつた義綱の父義生も後を追つて腹を斬つた。

かくして、慌しく政権の世代交代が遂げられ、前もつて尚義付きとなつていた義綱の時代がやつてきたのである。そんな中での嫡男の誕生は義綱にとって、政権掌握に花を添える、洋々たる未来を約束するものと感じられたに違いない。

しかし、時代はその祈りとは反対に混迷の一途を辿り、やがて塩松にも暗い影を落としてゆくことになる。

当時、巷では伊達稙宗・晴宗父子の相克、所謂「伊達天文の乱」が南奥羽全域を席巻していた。

この擾乱は、天文十一年に晴宗が稙宗を当時の伊達氏本拠西山城

に幽閉したことが、発端となっている。父子不和の原因は様々取り沙汰されているが、争乱に至る直接の原因是、植宗の三男時宗丸が越後国守護上杉定実の養子となるに当たって、植宗がその護衛として精兵を多数付けようとしたのに対し、晴宗が異を唱え入嗣自体を阻止しようとした為とされる。

晴宗の思惑は一応遂げられたものの、事態は思わぬ方向へ進んだ。幽閉されていた植宗はその寵臣小梁川日雙によつて救出されると、周辺諸氏の協力を得て反撃に転じたのだ。

伊達家中には晴宗を支持する者が多かつたものの、周辺諸氏の多くが植宗を支援したことから、開戦当初は植宗党の勢力が晴宗党を圧倒していた。その主勢力となっていたのが、田村隆顯・懸田俊宗・相馬顯胤といった植宗の女婿達や畠山家泰・義氏兄弟・石橋定義などである。この中でも老練な定義は、所領が彼らの中心に位置することもあって、諸勢力間の連繫を取り持つて糾合するのに大きな役割を果たしていた。

しかし定義の死後、残された尚義に父の代役は果たせず、植宗党の足並みは次第に乱れていった。そこへすかさず晴宗が内応の手を差し伸べたものだから、諸氏家中内部で対立関係が生まれ出した。各々自領内の平定に力を尽くさねばならぬ状況となり、植宗への協力を控えざるを得ない者が多くなる。その為、元々伊達家中では支持者の多かつた晴宗の方へ、一気に流れが傾いていった。すると諸氏の間でも、その動きに敏感に反応した者から次々と鞍替えしてゆき、その傾向に拍車を掛けた。

塩松でも、義綱が中心となつて早く晴宗支持を表明、「父の遺志を尊重して植宗党に固執する尚義へ否を突き付けた。そして次々と家中諸士を糾合していつて主君の手足を奪い、最終的に尚義に晴

宗と諱みを通じさせることに至った。

この騒乱は結局、同十七年秋に至り、足利將軍からの重ねての和睦命令に従つ形で終結を迎えた。但し、終結したのは父子相克のみであり、そこから派生していた数多の対立関係は、その後も延々と続くことになる。

この争いが奥州に於ける戦国時代の皮切りとされる所以である。

その中で大阿弥丸は、僅か安達半郡の塩松を守る為に汲々とし、ときには下手な謀略にまで手を染めている父の姿を、鼻先しか見えぬみみつちい男として他山の石と見なしながらも、心の奥底では本人の気付かぬ内に鏡として培っていた。

暫くして好い日を選び、大阿弥丸は塩松城へ遷ることになった。

小浜城を出るに当たつて、父義綱が言った。

「其方がこの家を出、主家の養嗣子になつたとて、儂の子でなくなつた訳ではない。父親が一人になつたと思うがいい。今後は一層自らを律し、塩松殿の後嗣たらんとせよ」

尚義が穢やかな人柄であるだけに、義綱は息子が甘やかされるのを懸念しているようであったが、大阿弥丸にしてみれば甘やかされたとてそれに溺れない自信はあつたし、今後この父の束縛から解放されることに心が浮き立つばかりだった。

兎も角も大阿弥丸は、かくして塩松城に入った。そして日を選ぶと、同地にて元服を執り行い、太郎左衛門斉義と名乗つた。

かつて尚義の先代定義は、嫡男尚義に跡目を譲つた後も大御所として住吉城に君臨し続けていた。その為、尚義は当主となつた後も、それまで数代の間二の丸的な位置付けとなつていた塩松城に差し置かれていた。

だが尚義は、定義の死後も継続して塩松城に住み続けたことから、逆に住吉城は一の丸、或いは大奥的な位置付けとして扱われるようになつっていた。

斉義は義父に随つて塩松城に部屋を与えられたが、内心は住吉城の方が居心地が良く、こちらに居を取りたかった。

その理由の一つとして、住吉城の書庫には埃を被つた蔵書が沢山あり、斉義はそれを思う存分に読みふけりたいというものがあった。

城内は人も少なく、また一人の父にかまわれることもなかったことから、一人を満喫できる、落ち着ける場所だった訳である。

斎義は、志保姫との婚儀を済ませ、初めてその姿をはつきりと見た。

かなりの痩せぎすで、髪も多少くせつ毛はあるが、思っていたような醜女には見えず、肌も白いし目鼻立ちも至つて普通の女だと感じた。ただ、話をするとき少しでもりがあり、知性の面でも父親を受け継いだのか向学心といったものは余り感じられず、斎義が改めて興味を惹かれる部分は別段なかつた。

さりとて斎義はこの頃まだ女色の経験がなく、その方面的欲望もさほど強くないということもあるのか、彼女に対しては別段の不満を持たなかつた。ただ知識として、「これが醜女である」と頭に詰め込まれただけのことである。

何にせよ彼女の存在は彼にとって是も非もなく在るものであり、「ひついうものだ」以上のものにはなかなか昇華し得ないものだつた。よつて暫く経つてからの初めての床入りの後になつても、その感覚は当面改まらなかつた。

姫の方でも、自分のよつた容姿が醜女であるという知識を持つているのか、深い情を斎義に求めることはなく、よつていつまで経つても子を成さなかつた。尤も、貧弱な彼女の肉体で子供を宿せるのかといふことは、甚だ疑わしいものだが。

互いにそんな状態では、とてもすぐに睦まじい関係が築ける訳もなく、斎義が時折通つたぐらいでは、なかなか会話が弾むようにすらならなかつた。

それでも斎義は、姫のところへ定期的に通つた。それは新婚としては極めて少ないものだつたが、双方から不満の類は一切出てこな

ことから、画家の父母とて何も口を挟めなかつた。

数年が経つた。元号は永禄（1558～70）に代わっている。

斎義を乗せた馬は領内を駆け回っていた。すぐ後には数騎の供が付き随つている。

主要道は元より、裏道細道はおろか獸道に至るまで、塩松中の道という道を彼らは既に精通していた。

道の傍らで農作業をしている領民達は、彼らが通り掛かるとニッヒリと微笑んで頭を下げる。彼らは領民からの評判が良かつたのだ。

斎義が主家に入嗣して以降、領内武士団の特に若衆が皆、彼を鏡と為したことから、自動的に綱紀肅正が行われ、全体的に質が向上した。その結果、斎義へ領民の感謝が集まつた次第である。

勿論、初めからそう巧く行つた訳ではない。

入嗣間もない頃の斎義は供を連れることを嫌い、単騎で遠駆けなども平氣でしていたものだった。それに対して周囲は、頻りに輕挙と諫め、供を具すように言つた。

だが斎義は、斯様な心遣いは却つて迷惑だった。

家臣たる近習らは、万事体裁を気にして遠慮するものだから、気分がだらけて一向にのつてこない。加えて斎義の方でも、近習に気を遣わせまいと逆に気を遣つてしまつものだから、無駄に疲れるのだ。

そこで千思万考の末、少しでも気を遣わずに済む親族を近習の中に据え、重用することにした。第一が助右衛門親綱で、第二が長門義員である。

親綱は斎義にとつて、腹違いではあるが同年の弟である。

幼い頃から何故かこの取つ付きにくい兄を慕い懐いており、元服して義綱の新たな後継候補の筆頭となつた後も、毎日のように兄の許を訪ねては付いて廻っている。

斎義も、彼のことだけはどんなときでも邪魔に感じないことから、これも彼の能力と思つて評価し、父達が何も言わない限り好きに居させた。

周囲からはよく似た兄弟と媚びた声も喧しかつたが、そう言われると何だか彼に申し訳ない気がして、逆に気が重くなつた。

周囲によく気を配りよく笑う、人懐こい性格から、家中の皆に好かれた。

長門は義綱の従弟義円の子である。

幼い頃から、信夫・伊達を中心に行修する山伏となつてゐる父に従つて、山を棲処としていたのだが、斎義が尚義の養子となる祝いに訪れたときに、お付きの者として請われ還俗し、小浜城下に屋敷地をあてがわっていた。

その出自の故か気性は荒く、斎義を主筋と敬う姿勢も少なかつたが、斎義にはそれが却つて心地良かつた。

それに、彼は山を熟知しており、一緒に遠駆けをしていても得るもののは多かつた。よつて斎義は、彼のことをある程度敬意を払つて接した。

元々の粗暴な振る舞いや性格が改まることはないものの、龍を驕ることもなく、農繁期には野良仕事の手伝いにも進んで精を出している。その故に領民や仲間内から特に好感を持たれた。

この一人を近侍させるようになつてから、他の者の斎義に対する態度に少しづつ変化が顯れ出した。つまり、一人を緩衝として御前にもそぞろに振舞うようになり、更には一人を参考として自然に

接するようになつていつたのだ。

だから本当のところ領民達は、彼ら一人に感謝すべきなのかも知れない。

城に戻ると、馬場まで尚義の小姓が迎えに来ていた。

「大殿がお呼びでござります」

斎義は馬番に手綱を預けると、足取り軽く義父の許へ向かつた。

案の定、尚義は斎義に甘かつた。

待望の後嗣であるから致し方ないとはい、ねだられるままに、否、ねだられずとも、ねだられたもの以上に、贅を尽くした馬具や当世具足、更には当時まだ奥州では珍しい鉄炮まで取り寄せたりと、金に糸目を付けずに買い与えていた。

「お呼びですか」

尚義はいつにも増して上機嫌に、入室してきた養嗣子を迎えた。

石橋尚義は世間では暗愚と蔑まれていたが、義綱を始めとする重臣がよく補佐しているのか、決して家中や領内が乱れている訳ではなく、戦乱の打ち続く他領に比べれば寧ろ平穏だった。

ただ確かに尚義は斎義の目から見ても、能力的に恵まれているようには映らなかつたし、自己を高めよつといつ野心が強いとも感じられなかつた。

ただ、無闇に周囲へ氣を配り、民や家中を勞わろうという気持ちだけは強く、愚よりは鈍の方が当たつていると内心思つていた。

側女の酌で赤くなつた顔を弛緩させ、手を付いて挨拶した斎義に新しい盃を渡すと、手すから酒を注いだ。尚義は決して上戸ではないが酒好きで、呑むと途端に饒舌になる。

斎義は話が長くなる覚悟をした。

「お」との初陣が決まつたぞ」

尚義は口を付けた盃を一気に乾すと、両手を胡坐の膝にあてがい、

神妙な顔で義父を見つめた。尚義が続ける。

「伊達家の騒動は、おとも聞いておらつ

「……はい」

南奥の戦国時代は、やはり伊達氏の動向抜きでは語れない。

永禄初年以降、伊達晴宗は惣領の座を保有したままで、実権を後嗣総次郎輝宗へ徐々に移行させてゆき、自らは羽州米沢から信夫郡杉田へ遷つて、伊達氏の本貫から周辺へ目を光らせるようになつた。

これは、晴宗が当主となつた際に伊達郡西山から米沢へ本拠地を遷して以降、当地方に相馬氏や畠山氏を始めとする他氏から侵略の目が向けられるようになり、周辺の伊達麾下諸将にも不穏な空気が漂い出していたことに起因する。

その一連の動きの中でやがて、伊具郡北部の伊達一門田手宗光に、相馬を後ろ盾にしていると思われる謀叛の嫌疑が掛けた。

それに対し、輝宗が中途の刈田郡まで出兵して弁明を受け付けたところで、晴宗は「軽挙を避けるように」と輝宗に諫言すべく、伊具郡境の石母田まで出張つた。

このとき、晴宗出張の報に接したその老臣中野宗時が、勝手に主不在の米沢にて防備を固め、事態の推移次第では宗光と共に謀して輝宗を挾撃しようとしているのではないかと思わせる、疑わしい動きを見せた。

輝宗はこれを一連のはかりごとと判断し、晴宗に対しても不審の目を向けるようになる。身の危険を感じた晴宗は伊達郡東根の保原まで退き、周辺諸氏に籌策を求めた。

現況は、今後の展開次第では、天文以来の大乱にまで発展する危

険を孕んでいた。

斎義は「この事態に關して、尚義の意向に対し家中諸士が「こぞつて出兵反対を主張している」とまで知っていた。遂に尚義が我意を押し切つたのだと察すると、気が重くなつた。それが神妙な顔の意味である。勿論尚義は氣付かない。この後嗣は自分に異はなかろうと信じじきつていてるかのようだ。

「伊達殿から是非にと請われては、どうして断れよ」

「義父上が私を伴い伊達殿の處へ赴くのは、承りました。されど……これは戦さを避ける為のものであります」

「それは勿論だ。名田上は和解籌策だが、当地へ赴くに当たり、三十騎ばかり出張ることとした」

「何も御身が直接に出張らずとも……。書簡にても用件は果たせるのでは」「ござりませぬか。三十騎とはいえ諸士準備に追われることにもなり、出費も無駄に嵩みましまつ。また此度の伊達家の騒動、あまり他家の者が口を挟む類のものではないのではと」

「お」と自身は、自分の初陣を如何思つておる。勿論、戦にならぬが最善ではあり、戦陣を田の当たりにすることはないかも知れぬが、場の雰囲気を知ることはできよ」

「私に晴れの場を設けてくれようとする義父上のお気持ちは有り難く、また嬉しく感じております。今後行く末を思えば、伊達家中に顔を売る効果もありましょ。それど……」

尚義は満足そうな顔をして、斎義の言葉に割つて入った。

「そもそもおひつともあひつ。お」となれば、そつと聞いてくれると思つた

そして尚義は、このとこりの酒を呑むと毎度口癖のように語つて聞かせる話を、ここでも繰り返すのだった。時折れつが廻らなくなるもの、いつも言っている文言だけに、言葉の選択が次第次第に洗練され、まるで何かを読んでいるかのようである。

「かの天文の大乱の折、諸家中面従腹背にして叛腹常ない有り様だった中、ご先代の塙松のみは平静を保ち、伊達家の和睦調停に重きを為しておった。されどご先代は志半ばにして病に斃れ、残された儂は若輩にしてその能力ご先代に及ぶべくもなく、大乱は当家中にまで漫食されることとなってしまった。今度こそ伊達家の内紛を調停しおおせ、ご先代の遺志を貫かん」

尚義はそこまで一気に言つと、満足した顔で盃を口に運んだ。

義綱らも、尚義にそつと言われては、そもそもあのときに主君へ否を突きつけたという後ろめたさがあること故、重ねての反対はできなかつたことだらう。

齊義も、これ以上何を言つても効果のないことを悟つた。

日を選ぶと、尚義は留守を義綱に任せ、ものものしく出陣した。

一行は塩松を出ると、川俣を経て月見館へ至った。

伊達郡内では広瀬川の流れに沿つて北上する。即ち、三春方面から塩松・川俣・懸田を経て梁川で仙道の本街道と合流する、「小手道」と呼ばれる南奥州を縦断する脇街道として古来重要視される道である。

川俣領主桜田氏は伊達氏の麾下ではあるが、比較的自立性が強く、周辺の領地は自治領となっている。よって、川俣・懸田の中間点に当たる月見館の地峠部から、本式に伊達領となる。

天文末年に晴宗が当地方の領主懸田俊宗を滅ぼす以前から、当地は要衝として重要視されており、伊達治下になつてからは更に新たな城砦や関所が築かれ、街場も大きくなつていった。

その理由は勿論、塩松への警戒ということもあるにはあるが、それよりも相馬に対する備えとしての色が強い。

即ち、月見館南北麓から東へ向けて、海道まで通じる二筋の分かれ道が走っているのだ。いずれも相馬軍による伊達郡遠征の際に通り道・関門とされ、天文の乱当時も、行方郡の小高を本拠とする相馬顯胤の軍勢が幾度となくここを通り、懸田氏の助勢に駆けつけている。

相馬氏は、乱終結後間もなく急病に斃れ天折した顯胤の跡を、若年の嫡男盛胤が継いでいた。爾來暫く、盛胤は自領内の統治に力を注がねばならぬ状況となり、それは晴宗が懸田討伐を容易に成し遂げ得た要因にもなっていた。

尚義一行が小手道を北上すれば、月見館本館は右手に現れる。

それ自体は小型の山城であるが、周囲は塩松の中心地にも劣らぬ活況となつており、川俣以降人の往来も増えていた。

これが伊達領の南限の一関門であることを併せ考へるに、斎義は伊達家の規模の大きさに打ちのめされる思いがした。

その様子に気付いたのか、尚義は気分良さそうに馬に揺られてい

る。

一行は関所通過後、懸田から小手道をはずれ、保原城へ至った。ここまでが一日の行程である。

当城は晴宗の功臣中島伊勢の居館である。現在の流れとは離れたが、当時の当地は阿武隈川の氾濫原上に存し、川から導水して堀を為し、曲輪を形成する平城としてあつた。

尚義と斎義は、この城内で晴宗に対面した。

「これは塩松殿。」足労いただき恐縮」

「我らにできることあらば、何なりと申しつけくだされ」

斎義は一人の様子を窺つている。尚義は幾分緊張が表情に出ているようだ。

晴宗は口元を小さく歪めているが、どうやらそれが喜んでいる表情らしい。それどその造作は、鋭く厳しい目つきともあいまつて、神経質な性格をよく醸し出していた。

「輝宗は些か猜疑が過ぎるようだ。気持ちは解らぬでもないがの」と、言つますと

輝宗が警戒しているのは、今伊具郡で起きている騒乱そのものだ

けではなく、その処理如何によつては領内のどこまでも飛び火し得るという家中の統治体制にある。

今回、田手宗光への対応が余りに寛大な处置では、家臣達は皆、主家を甘く見るようになるだろうと考えているのだ。

現に中野宗時の動きは余りに輝宗、延いては主家を蔑ろにした行為であり、晴宗の意を受けたものでは勿論ない。

晴宗はそれを承知しながらも、長い間苦楽を共にしてきた重臣達をただ見殺しにする訳にも行かなかつた。

また、輝宗の意見通りに締め付けを強めれば、家中諸士の反発を招き、家が四分五裂してしまうやも知れないという懸念もあり、ずるずると斯様な状況へと落ちてしまつたのだ。

この状況を正しく理解していれば、晴宗とて始めから尚義に調停そのものを期待などしていないということは、判らうるものだ。

即ち、現在の伊達家中を元の鞘に收められる者は、一人しかいな
い。

「塩松殿には、丸森まで行つて貰いたいのだが、……」

尚義の表情に一瞬緊張が走った。

「すると、円入殿に仲介の労を執つていただこうといつ訳ですね」

晴宗は石母田から伊具入りしようとして、輝宗から鉾先を向けられた。

そこで、尚義に伊具入りして貰い、同郡丸森村で隠居している植宗に仲介を頼もうという訳である。

人畜無害な尚義なれば、輝宗とて何の謂われもなく攻撃を加えることはあるまい。

植宗は天文の乱の和睦条件に従い、丸森を始めとする周辺五箇村を隠居扶持としてあてがわれ、その後入道して直山円入を号していた。

伊達家政の表舞台から遠ざかつて暫く経つが、家中諸士及び周辺諸氏への影響力はまだまだ保っている筈である。殊に相馬氏とは乱後も引き続き懇意にしており、これ以上の適任者はいなかつた。

漸く話が通じ安心したのか、晴宗は斎義を向いて表情をほんの少し緩めた。それでもその視線は、慣れぬ斎義にとつてまだまだ威圧を感じるものであった。

「そちらが太郎殿じゃな。噂に違わぬ面構えをしていい」

斎義は油断していた。突然に話を振られたことに動搖し、晴宗の視線に思考能力を奪われ、何と答えてよいやらまるで言葉が浮かんでこない。

しかしそこへすかさず、尚義が嬉しそうに話に割つて入った。気付けば、当初の緊張はもつっかり散じている様子である。

「伊達殿の推挙がなければ、手持ちの人材に気付かぬところでした」

「暫く見ぬが、備前は元氣でしょうな。当方が落ち着いたら、どうか一度遊びに遣わしてください」

斎義は、晴宗が言った自分に関する「噂」とは如何なる噂か、婿入りの話を自分に持ってきたときの実父備前義綱の表情と併せて、気になった。

天文の乱の折、稙宗党だった尚義を晴宗党へ導いたのが義綱である。

当時から義綱は伊達通となつており、殊に晴宗の塩松番となつていた石母田安房とは懇意にしていた。

安房は塩松訪問の際には小浜に幾度も宿泊しており、斎義も幼い頃からよく見知っていた。その辺りの筋から、自分に関する何らかの情報が伊達にもたらされ、婿を探している尚義へ推薦するという過程があつたのだろう。

また、斎義の弟親綱の室も、この筋を経由してあてがわれている。中野宗時の娘がそれである。

晴宗は表情を動かすことは殆どなく、媚びるよつに明るい表情を「口口口口させている尚義とは対照的だった。

翌日、一行は晴宗から預かつた書簡を携え、丸森に入った。

丸森城は、阿武隈高地の北辺から西へこぼれた突端部に位置する山城である。

麓を南から西を経由して北へと、本丸を三方から囲繞するように内川が流れ、阿武隈川へ注いでいる。城は西側の川に突き出た曲輪

を頂点に、東へ連なる梯郭式となつており、古来伊具郡の中心として、そして阿武隈廻船の中継基地として、栄えてきた場所柄である。

尚義の表情は、保原を出たときから緊張でこわばつたままだった。晴宗と会つたときの比ではない。

植宗と晴宗はとうに和解しているとはいえ、寝返つた尚義にとっては、やはり依然として余つのしばつの悪い相手ではあった。

植宗は、白銀の総髪に袈裟をはおり、穏やかな表情で一行を迎えたが、その所作はすっかり老爺の趣となつていた。

「塩松殿、久しいのう。そちらがお嗣子か」

尚義は、植宗の優しい言葉にすっかり恐縮し、「あの」とか「はあ」しか発せないでいる。それを差し置いて斎義は、保原での失態を挽回するように、意気込んで挨拶した。

「お初にお目にかかります。太郎左衛門斎義にござりまする」

「つむ。利発そうな若人じや。当家の総次郎殿とは、歳も近からう。相馬の孫次郎殿と同年くらいかの。どうか皆、末永く仲良うして欲しい」

相馬の孫次郎とは、盛胤の嫡男義胤のことである。相馬氏と懇意にしていた植宗は、丸森に遷つてからも一層相馬をいたわり、末娘を義胤に嫁がせている（後に離婚する）。

尚義は、植宗と斎義の会話で漸く少し緊張がほぐされ、用件を伝えた。

「保原より書簡を預かつて参りました」

植宗は受け取った書簡に目を通した。

「総次郎殿は早熟じや。若氣の血氣につかされて足元をすくわれぬよう、儂からも一寸言つてやらねばとは思つておつた。……ところで塩松殿、御辺らはこれから何処かへ攻め寄せようといつ趣向かの」「えつ。いや、あの……」

塩松城を出たときから尚義は大鎧、斎義は当世具足を身に着け、他の武者も胴丸・腹巻を着用、すっかり臨戦態勢を整えている。保原で一泊して状況が大方見えてきても、尚義が総武装を解かない以上、諸士もそれに追随せざるを得ず、連日軍容を調べての行進は行列の全員が負担に感じていた。

「助力を請け負つて貰えるのは有り難いが、そのなりでここに居られては、却つていらぬ混乱を招きかねん。通達の旨は承つたので、早う戻つて晴宗へ伝えてくだされよ」

尚義の顔は赤くなつて、再び固まつてしまつた。

一行はそのままとんぼ返りで丸森を発つと、途中再び保原にて晴宗と面会、城下で一夜を過ぐし、翌日往路と全く同じ道を辿つて塩松へ戻つた。

結局、この混乱はその後も收まりず、収束まで数年を要す。

晴宗は混乱が終結したら輝宗に跡目を譲るとし、輝宗は現況のままで跡目を継ぐことを望んだ。

問題は、中野や田手といった旧来の重臣が輝宗を蔑ろにして家政を牛耳らうとしている、という疑いがあることである。

晴宗が何とか穩便に済ませたいと輝宗に寛恕を求めて、輝宗は誅伐を主張して譲らなかつた。しかし、まだ正式の当主になつていなゝ輝宗の手勢だけでは、それらの勢力を討伐することも叶わない。

この間、稙宗はずつと和解への道を探り続けていたが、その道は開けぬままに体を壊し、枕の上がらぬ身となつた。

結果、これを機として父子は漸く互いに歩み寄りを見せ始める。

そして、田手氏の家格を一門から一家に下げて所領も減封するが、

他には手を出さない」という条件を輝宗が呑み、正式に跡田が譲られる運びとなつた。

だが、この一応の解決に、稙宗は間に合わなかつた。享年七十八。その逝去は永禄八年六月。輝宗の後継はその後間もなくであつた。

晴宗は、立場は変われどその後も杉田に住し続ける。

輝宗も跡田こそ譲られたものの、中野宗時一派が依然輝宗に出仕せず、家士を代理人として用を足していることに対し、何の手出しもできずにいた。

因みに、この宗時の家士の名を遠藤文七郎といつ。

結果として宗時はますます増長してゆき、元亀元年（1570）に至つて、遂に輝宗との間に戦端が開かれる。

そして戦さに敗れた宗時は相馬へ逃れ、更に会津へ流れてゆく。この戦さで文七郎は輝宗に内通し、その信任を得、第一の側近としての地位を踏み出すことになる。後の遠藤山城基信である。

結果として尚義の出兵は、直接には殆ど何の役にも立たなかつたが、塩松に戻つた後、斎義は一つの建議をして容れられた。

月見館の威容を目の当たりにした斎義は、これに対応する城砦が塩松側にないことを心許なく感じた。

針道や木幡に城砦はあるものの、それは当地を統治する麾下家臣の持ち城であり、厳密には石橋氏のものではない。

よつて、直轄する北部要衝を築くべきであると主張したのである。

そして選地されたのは、針道郊外の愛宕森である。

隣接する白猪森をも取り込んで利用すれば大軍を籠らせることができるし、盆地が北に拓けて伊達領境まで見渡せることから、まさに伊達氏の南方経営に対応する堅牢と為すのに相応しかつた。

この要害は早速に繩張りが始められ、小手森城と名付けられる。

斎義はこれを端緒として政事への関与を深め、家中にて高い評価を得るようになる。

次第に面持ちや体格も大人び、周囲の接する態度も一人前扱いするようになつていった。

その為、結果として尚義を蔑ろにせざるを得ない行動も目立つようになり、かつての睦まじい関係は次第に冷えてゆく。

斎義は一層塩松城に屈づらさを募らせたことから、尚義に願い出て住吉城内に部屋を与えられ、姫を伴つて遷つた。

そのような状況になつても、斎義は（心中はどうあれ）形式的には尚義への礼を重んじ、孝を怠らぬよう、気配りに意を用いている。

尚義としても、独自の勢力を築こうとしているのが替えのいない後継者であることを知っていたから、「廢嫡」という波風を立てんと謀る一部の側近の声に難色を示していた。

ただ、酒を呑んで万事を人任せにし、自らは總てを流すことが多くなつていった。

数年が経つた。

この間、養父子の関係は（表面上は）何とか平穏を保つていたが、永禄十年に至り、事情が変わった。

前年尚義は、一人の妾から勧められるままに禅僧の講義を受け、求められるままに堂を一宇寄進した。特段のことをした訳でもなかつたのだが、暫くして加護が顯れる。

その妾が身ごもり、この年の春に男子を産んだのである。

この子供は松丸と名付けられ、母子共に住吉城の奥向きから塩松城に遷された。母親は大河内備中の娘である。

大河内氏は石橋家の家老で、家格では大内氏と同様である。これまで筆頭家老たる義綱の施策を後援する姿勢を貫いていたものの、この一事によつて備中は、義綱への対抗意識を俄かに燃やし始めた。

尚義としても、才氣走るばかりで最早かわいげのない（既に情も半ば失せている）養子よりも、愛らしい実子の方へ心が移るのは自然のことだ、寝ても覚めても「お松やお松や」と、それこそ目に入れても痛くないというほどの可愛がりよう。

妾や舅に促される形で、斎義を廃し後継を松丸に据え直す決心をするのに、たほど時間はからなかつた。

斎義は直接にその血を語られる前から、廢嫡される予感を抱いていた。

このことに関して、養子よりも実子が可愛いという尚義の思いを恨む気持ちはないものの、疎外感は否応なく押し寄せ、今後への不安はどうにも拭えない。

実家に戻されるだけなら良いが、免罪を着せられ誅されてしまうのは御免だし、やはり一度は手にしかけた塩松殿の座をただ空け渡すのも癪だった。

考えた末、斎義は住吉城内に部屋を与えられている尚義の側室や妾数人に付け文をした。尚義に洩れぬようという配慮は勿論、遠からぬ過去に尚義が通つたという履歴の下調べなど、事前の根回しにぬかりはない。言つまでもなく、志保姫にも秘密である。

彼女達の心には、酒乱氣味で老年に差し掛かっている尚義に気兼ねする部分は既になく、いつそ斎義の妾であつたならと願う者ばかりだつた。そしてそれは、そんな側室や妾達の心証を慮つていてるそれぞれの侍女達も同様だつた。

斎義の許には、日時を書いた熱い返書が複数寄せられた。

そんな中、尚義は無防備にも斎義を城に残したまま、松丸母子を伴つて昨日はこひら明日はあちらと行楽にうつつを抜かしている。

また、松丸誕生は禅宗に帰依した加護だとして、十願寺を廃して時衆僧を皆追い出し、その寺領を全て招聘した禅僧達に与えた。領内全域にも触れを出し、殆どの時衆道場は他の宗派に取つて代わられた。

人々の目がそれらのことを向いているその間に、斎義は返書をよこした妾の全員と、それぞれ数度に亘つて情交を結んでしまつていた。

丁度、それまで心の拠りどころとしていた時衆を失い、不安を募らせていた彼女らを慰める、といふ虚偽の口実があつたこともあり、事を運ぶに当たつて障りはあるでなかつた。

斎義は決して捨て鉢になつていた訳ではない。策略あつてのこと

である。

即ち、尚義の酒癖 每晩酩酊するまで呑んで翌朝になると昨晩の記憶がなくなることが多い、周囲から盛んに迷惑がられているその酒癖に目をつけて、将来の再起を目指し、塩松の行く末に混乱を巻き起こすこと種を播いていたのだった。

やがてそれは芽を出すことになる……。

案の定、秋を前に斎義は一方的に放逐され、義綱の許へ返された。少年期から青年期の十年余を、尚義の後嗣として過ごしたことになる。

姫君との間には相変わらず子がなかつたが、離縁させられる「こと」はなかつた。

松丸という後継者があることから、新たに婿を取る必要もないのは当然ながら、大内氏の礼聘を継続させる為の配慮には、尚義なりに気を遣つたのでもある。

斎義から「尚義の後嗣」という資格は剥奪され、斎義が婿として石橋家に入るという形から、姫が大内家の嫁に入るという形になつた訳である。

またその御免料として、尚義から銘馬と十文字の銘槍が下賜された。そして他に何か欲しいものがないか訊かれると、斎義は住吉城の書庫にある蔵書を望んだ。

尚義は「何だそんなことか」と、一部家相伝の物を除いてそれを許可した。

大河内一族を除く全ての家中は、斎義放逐の決定に溜息をこぼした。

これまで家中は皆、斎義が尚義の跡を継ぐことを当然と信じて多大な貢物で誼みを通じ、また斎義が継ぐことでの家が隆盛に向かうことを期待していたのだ。

それほどに斎義の評価は、内外に高くなっていた。

「太郎、口惜しからう。儂も今度ばかりは辛抱ならん」

義綱は小浜へ戻つて挨拶に来た斎義を前に、歯軋りして悔しがつている。

されど斎義は、今回の一事で家中が皆心情的に味方となつたことを感じ、また、犯した禁忌を一切暴かれることなく小浜へ戻りおおせたことから、今後の展開が楽しみでならない。そんな気持ちを抑えるのに腐心した結果、知らず通常よりも冷静に振る舞つていた。

「父上、今暫く辛抱なされませ」

そう言つと、歯を見せて口を笑つた形にした。

義綱は口をぽかんと開けたまま言葉を失つていたが、斎義は構わず一礼して退出すると、親綱の屋敷へ向かつた。

親綱は再び大内家の後嗣の座を斎義へ空け渡すことになる。だから斎義も彼に対してもだけは後ろめたく、済まない気持ちを感じていた。だが、何と言つて会えばいいのか。あれこれ思いを巡らせど巧い言葉は浮かばず、裏腹に会いたい気持ちから進む歩に考える時間を削られ、まるで考えがまとまらぬままに面会してしまつた。

しかし親綱は、そんなしがらみはまるで感じさせずに、いつもと変わらぬ明るい笑顔で異母兄を迎えた。

「帰りましたね」

思わず口を突くままに戯れ言が洩れた。

「当面、……この顔を毎日お田に掛ける」

「なに、住吉まではるばる会いに行く手間が省けるだけのことです
緊張が一気に解けた斎義は、大笑いをした。自分でも珍しいこと
だと思つた。

すっかり気分が楽になったところで、斎義は志保の許へ戻った。外出もまれな深窓の姫君は、駕籠にほんの短い間揺られただけで具合を損ね、小浜に着くや義綱へ挨拶もせぬままに床を敷いて休んでいた。

斎義が顔を出すと、志保は床から身を起こした。

「少しば楽になつたかね」

「ええ。今からでも貴方の二両親へ挨拶に参らねばなりません。すぐ準備致しますので、少しお待ちください」

「よいよい。そんなものは。これまでと違い、狭い所帯。そのうち嫌でも顔を合わされることになる故、何も気にすることはない。志保のことは話しておいたから、今日はこのまま休んでいるがいい」

志保は「でも」と躊躇つていたが、やがて斎義に従つた。そして俯いたまま、斎義に侘びを語つのだつた。

「私も再三父上には申したのですが。一度決めたらなかなか他人の言つことを聞かぬお人でありますよつて、貴方には何とお詫びを申してよいやら」

「何のことだ」

「『塩松殿』の名跡は貴方が継ぐのが相応しいとは、家中の誰もが、奥向きの者にすら異存のないことでありました」

斎義は「何だそのことか」と氣にも留めない風であつたが、ふと意地悪そうな目をして凄んでみせた。

「追つてこの儂が主家を滅ぼし塩松殿を篡奪すると言つたら、其方

は如何する

志保はまるで落ち着いたままである。

「父尚義を、また松丸君を塩松殿たるに足りぬ器量であると、『自分を塩松殿と自認して周囲もそれを認めるならば、是非ともおやつなされ。それがお家の安泰となりましょ』」

斎義はこのところ、志保の成長に目を見張っていた。

身体的なものや知識ではなく、人間的な。つまり、会話をしていくて気がストンと楽になるときがあるのだ。

本気とも戯れ言とも取れる危うい会話でも斯様に気楽に話せるのは、彼女の気持ちの大きさが受け皿になつていてるからだと、斎義は感じていた。

結婚して十年、漸くのようすに打ち解けてきた夫婦は、一つの束縛から解き放たれ、この後速度を増して親密になつていいく。

斎義は微笑んだ。
「志保が塩松殿の系譜を途絶えさせぬことを望むのなら、そのように心得よ」

志保も曖昧に微笑みを返した。

それからの斎義は、尚義から下された十文字槍にて鍛錬を重ね、馬で塩松中を僅かな供を連れ、時には単騎で駆け回って過ごす日々だった。供の面々も、それまでと殆ど同じである。

即ち変わったことといえば起居の場を遷したことだけで、斎義にしてみれば却つて快適な生活である。

放逐の事情はすぐ一般領民にまで知れ渡り、斎義は彼らから一層慕われた。

斎義も、それらの態度の多くが同情からるものだと気付いていた

が、そんなそぶりはおくびにも出でず、只管に人の好い若様を演じている。

義綱の怪訝な表情だけが時々煩わしかつたが、口を挟んでくることもないことから、気付かぬ振りをして放つておいた。

斎義放逐から暫くして、尚義妻に再び懷妊の報が出た。今度は百目木城主、石川摂津綱政の娘である。

石川氏は常陸国境石川庄の庄司の庶流で、古来塩松地方の土豪として勢力を張り、中央から塩松へ下向していく諸名族の麾下となることで家を保つてきた。

よつて石橋家中での家格こそ低かつたが、この摂津は持ち前の社交性と周辺諸氏に名と顔が売れていることによつて、家老並に推挙されていた。

居城百目木城は塩松東南端にあり、その支配領域は相馬領と田村領に接している。即ち石橋家に於ける両氏との関係の構築維持は石川氏に委ねられ、石橋家中の相馬番と田村番を兼ねていた。

尚義がこの歳になつてからの俄かに続く妻の懷妊に対し、不審の噂も影ではまことしやかに囁かれていたが、尚義はそんな声は歯牙に掛けず手放しに喜んだ。

義綱は焦る心に唇を噛む日々を続けていたが、斎義は平然としており、時に父の名代として塩松城に出仕しては、過去に尚義の養嗣子としてあつたことなど忘れたかのように、臣下の礼を以つて伺候したりしている。

その姿勢は多くの者に感銘を与えた。

尚義も、放逐後の斎義の潔さに感心し、昔の如くとまでは行かずとも、再び好意的に接するようになつていった。

翌年の春を迎えると、尚義は松丸を伴い、大河内氏の実家宮森城

内の塙松神社へ宮参りすることになった。昨年の誕生以来、何度も私的には参詣していたが、今度のは公的意味合いが強く、大規模なものだった。

大河内家の本拠宮森城は、小浜の南隣、小浜川の西岸に立つ小型の山城で、南大手、北搦手、南から西麓に掛けて小さな街場が形成されている。

神社は城域の北曲輪に位置する。前九年の役の折、源頼義の臣伴助兼が尊信する宇都宮慈現明神を勧請したのが縁起で、大河内家はこの神社の宮司職も兼ねている。そもそも宮森の地名もこの神社に因っている。

参詣を二日後に控えた午後、斎義は出仕から戻った義綱へ声を掛けた。

「父上、内密のお話が」

斎義は今回の参詣を一つの好機と捉えていた。

義綱の方でも何やら思うところがあつたようで、重く領いた。黙つたまま連れ立つて奥の間に入り、人払いして対座すると、義綱の方が先に口を開いた。

「百目木を抱き込もうと思つ」

義綱の視線が斎義を刺した。

斎義は一瞬目を合わせたが、すぐに落ち着きなく顔をそむけ、ただ頷いた。

義綱の言葉は、斎義の考えと同じだった。だが義綱のよつた殺氣立つた目をしていたら、誰でも不審に思うだろう。

内密に重大な話をするときこそ、何気ない仕草をするべきである。

斎義は（父は斯様な謀事には合わぬ）と、少々げんなりした。

「父上は直前まで、表立った動きは為さぬ方が良いでしょう。今晩、私が百日木まで行き、話を付けて参ります」

「何か書こうか」

斎義は頭を振った。

「口上のみの方が、後々安心です。万事お任せあれ」

斎義は、父の関与をできるだけ少なくした方が巧く行くと判断し、そこまで話すと早々に座を立つて多くを語らなかつた。

その夜、斎義は単身、搦手から徒步で外出し、百日木城へ向かつた。馬で行つたらどうかと義綱に勧められたが、断つた。

「馬は音を出しますし、できることなら家人にも内密の方がよろしいでしょ?」

塩松中に顔が知られているだけに、注意には万全を期す必要がある。斎義は、勝負の大半は今夜中に決すという覚悟でいる。

家中にて斎義の外出を知っているのは、義綱と搦手の門番のみであつた。

一刻ほども掛けて、斎義は漸く百日木城に着いた。
道中幾度か物音に身を潜めたが、何とか人目に付かずに済んだらしい。

出てきた門番は、訪問者を見るとすぐにそれを斎義と判別した。
斎義の側でも、何度か聞き覚えのある声からすぐに相手が誰かを特定した。名は知らぬが、何度か会つて挨拶程度の話をしたことのある下男である。

「これは小浜の若君。如何なされましたか
「折り入つて摂津殿に相談があつて参つた。内密にお取り次ぎを願いたい」

斎義は「内密」の部分を強調しながらも、声を潜めて言つた。

門番も小声になり、両手で制するような仕草をした。
「暫しお待ちを」

門口にて言葉通り暫く待つと、再び同じ男が顔を見せた。
「お待たせ致しました。他の番衆を説き伏せて、若君のことを他に知られぬよう根回しをした上で、大殿に直接伺いを立てて参つたので、思わぬ時を喰いました」

「手間を掛けた」

城内に入ると、なるほど、途中の門や通路には一切人影がない。
本丸に至つて前庭から中庭へ抜けると、一つだけ灯りの点つた部屋がある。

門番はその部屋の前の縁に手を付くと、小声で中へ声を掛けた。

「お連れしました」
そして斎義を促して下がつた。

障子戸を開けると、一本の燭台の側、目的の男が寝巻き姿で一人正座をして待っていた。

光の具合が、いつもはにこやかな面相が、目つき鋭く感じられる。

「夜分に恐れ入ります」

「いや、夜分にしかできぬ話もあるものです」

「……先ずは、『ご息女の懷妊、おめでとう』がります。もし男子が産まれた暁には、尚義公の後嗣となられましょう」

「松丸君が居られるのでは、ないかな？」

「大内では一族を挙げ、石川殿のお手伝いを致す所存」

部屋の光度に目が慣れてくると、摂津が光の具合などではなく実際に険しい顔をしていることが判つた。

斎義の追従に二「口りともしない。ただ一瞬目を閉じて小さく頭を下げただけである。

「それは……。して、備前殿は、否、太郎殿は何をお望みか」

「近く、殿が松丸君を連れて塩松神社へ富参りをすることは、お聞きでしよう。そのとき備中殿が田村を後援として謀叛を起こし、殿を弑し奉ろうとしている、といつ噂がありましてな。あくまで噂、ですが」

「ほお。松丸君の摂政になつて、権勢をふるおうといつ魂胆でもあるのですかな。備中殿も大それたことを。　いやいや、噂が本当なら、ですか」

摂津は眉尻を下げる、乾いた笑い声を小さく上げた。

漸く上げたその笑い声も、常日頃の優しさは微塵も感じられない。

突き放すような、冷たい笑い方である。

そして少しく斎義の目を見つめて黙った後、全て得心したかのように言葉を続けた。

「 よろしい。承りました。 して、産まれた子が女の子だったら、如何致す所存か」

「 いざれにせよ、松丸君の威勢は多く削がれましよう。後ろ盾なくば、実力で家中をまとめ上げるしかない。それができぬ程度の器量と見定めたときには 」

摂津は断定するように、斎義の言葉を遮った。

「 それを待つまでもありますまい」

「 されど昨今の田村の威勢を鑑みるに、余り弱みを見せれば付け込まれましよう」

「 寧ろ我らの方から、田村の懐に飛び込んで如何」

摂津は一瞬だけ片頬で笑った。

斎義は少しだけ安堵の笑みを浮かべた。

秘めていた本題は、開けて見れば相手と揃いのものだった。だが

その笑みは、相手には呆れて洩れ出たものと伝わったかも知れない。

この頃、田庄村三春の田村氏は、隆顯が隠居して嫡男清顯が跡を継ぎ、その威勢は最盛期を迎えていた。

即ち、常州佐竹氏の北進に対抗して会津の葦名氏と共同でこれに当たっていたが、その一方で葦名に対しても隙あらばその領地を奪わんと狙っていた。

その後方たる塩松を従えたなら清顯に後顧の憂いはなくなる訳で、内応の声を發せば飛び付いて來るのは必至の情勢だ。

斎義は話の主導権を摂津に持たせ、自分は聞き役に廻った。

「摂津殿貴殿。何か策でもありますのか」

「……お時間は大丈夫ですか？」

「このような場、そう何度も設けられるものではござりぬ。時間の許す限り、私も腹の中のものを總て出してゆきますので、どうかお心に留め置かれますよ」

「お互いにな」

斎義が百目木城を辞したのは、空が幾分白み掛けた頃だった。

「長々とお邪魔致しました」

「つむ。早つ帰られた方が宜しかり」

縁に出ると、先だつての門番が前庭と中庭の間辺りから音もなく駆けて来た。

「多少駆け足になります。なるべく足音を忍ばせてくださいされ」

「つむ。では」

斎義は摂津に一礼すると、門番の男に続いて駆け出した。

門番は城を出た後も引き続き山の中を先導し、小浜の郊外まで斎義を案内した。

塩松中を知悉したと思つていた斎義にもまるで知らない獣道ばかりを通つて行くものだから、眼下に小浜の見慣れた街並が現れるまで、自分が何処にいるのかまるで判らなかつた。

終始一人は無言だつたが、別れ際に斎義は、一礼して去るうとしている男へ、声を掛けずにはいられなかつた。

「待て。其方……名を何といつ」

男は立ち止まつて少しく躊躇つっていたが、聞もなく小声で応えた。

「小平とお呼びください。今後百目木からの伝達事項は、それがしが承ることのできるよう、お願いしておきます。よつてこれから、繰り返しあ田に掛かることになるやも知れませぬ」

小平は再度一礼すると、音もなく駆け去つた。

斎義は小平のお陰で、何とか日の出前に小浜城へ着くことができた。あれがどのような来歴を持つ男かは判らぬが、あまり詮索せぬ方がよからう。斎義は小平を得体の知れない者と見ながら、その使いをはじき出していた。

搦手から城内へ入ると、門番から伝言を伝えられた。

「先刻より、お父上様が書斎にてお待ちです」

「……まさか、ここへも」

「はい。殆ど一刻毎に。この口上も、直接に命じてゆかれました」

「……」

屋敷内へ入ると、義綱の書斎から光が洩れている。どうやら寝ずに待つていたようだ。

しかし斎義は放つておいて、そのまま寝た。高揚した充実感を害したくなかったのだ。

そして翌晩、斎義は義綱に会いに行つた。

義綱は、昨夜斎義が戻つてから会いに来なかつたことを、言頭にこそ出さなかつたが、釈然としない表情ではあつた。

斎義としては、昨夜の摂津との会話を今ここで全て語つて聽かせることは憚られるが、当面の指示だけはしておかねばならない。

一度、話し合つただけではあるけれども、斎義は、義綱よりも摂津の方が視野が広く、先の展望と対策もしつかり持つていると感じるようになつっていた。様々な話をしながらも、摂津から教唆されることが多かつたからだ。急な訪問にも関わらず、既に全てを諒解していたかのような話し易さも、後から考えれば不自然であり、不気味なことであつた。

「昨夜は如何だつた

「富森参りは明後日でしたな」「つむ」

「……備中殿に謀叛の噂があります。」存知でしたか?」

「初耳だが」

「あるのです。そんな噂が」

齊義は睨まんばかりに父を見つめた。

義綱は意を解したのか気圧されたのか、曖昧な返事をした。

「つむ。」で

「田村を援み、此度の富参りを好機と、尚義公を弑し奉らうとの企みになつてゐる由。そこで、決行か否かを田村へ報せる手立てとして、決行の場合にはその前日に、富森城内から狼煙を揚げて報せることになつてゐるのだ、と言われております」

「何? ならば、明日それが知られる訳か」

義綱は身を乗り出してきた。

「はい。狼煙が揚がれば、それで噂は本当だつたといひことになります」

「そうあつては、注進に及ばねばなるまいな」

「即刻討ち果たすよう、進言を願います。恐らく石川殿も同席して、口添えしてくれるこことでしよう。石川殿はそのとき既に塩松城まで兵を伴つておるやも知れませぬ。我らも万全の準備を整えて事に望まねば、功を立てることは叶ひますまい。明日は私も、予め中途まで出張つておりますので、合図が入り次第、富森の城門へ殺到致します。さすれば第一の功は我らのもの」

「合図とな?」

齊義は薄く笑みを浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0073z/>

変節

2011年12月7日22時54分発行